

2020年9月27日
聖霊降臨後第17主日
東京聖三一教会

エゼキエル 18:1-4, 25-32
フィリピ 2:1-13
マタイ 21:28-32

わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ

司祭 シモン 林永寅

今日一緒に読んだ福音書を読んで、ルカの福音書第15章に出てくる「放蕩の息子の物語」を想像するのは私だけではないでしょう。二つの物語には似ているところが多いです。二つの物語には同じく二人の息子が登場します。今日の喩え話の中に、兄は父から「ぶどう園へ行って働きなさい」と言われて、最初は「いやです」と言いましたが、考え直して父の言う通りにしました。放蕩の姿は見えません。「放蕩の息子の物語」に登場する兄も真面目です。一方、弟は父の言葉に「行く」と答えながら行きませんでした。「放蕩の息子の物語」に登場する弟について、聖書には詳しく記されていないから分かりませんが、似ているであろうと思います。もしかすると、「放蕩の息子の物語」は、今日の喩え話の後編かもしれません。今日の喩え話の弟が財産を処分して遠い国に旅立ち、放蕩生活の末に父の家に戻ってきた物語が「放蕩の息子の物語」のようです。違うところがあるとすれば、今日の喩え話に登場する弟は悔い改めたかどうか分かりませんが、「放蕩の息子の物語」の弟は悔い改めた、ということです。

ところで、なぜイエス様はこのような喩え話をなさったのでしょうか。それは、司祭長と長老たちに悔い改めを促すためでした。皆さんもよくご存じのように、当時の宗教指導者たちは偽善的でした。人に認められることを好み、律法についても形式的なことにしがみつきました。自分たちの既得権を維持することに没頭し、甚だしくは自分たちの経済的な利益のために神殿を「強盗の巣」(ルカ19:45)にしました。

当時、洗礼者ヨハネは「悔い改め」を宣べ伝えながら洗礼を施しました。宗教指導者のうちにファリサイ派の人々は洗礼者ヨハネから洗礼を受けようとしていました。しかし、それは形式的でした。それで洗礼者ヨハネは彼らに向かって、「悔い改めにふさわしい実を結べ」(マタイ 3:8)と叱責しました。

ところで、この悔い改めのメッセージはこのような宗教指導者たちだけのためのものだったのでしょうか。平凡な民衆のためのメッセージでもありました。民衆もまた、日常のなかに様々な過ちと罪を犯しているからです。そして、宗教指導者たちの不義を見ながらも沈黙をしていた過ちもあるからです。信仰者の義は、時折不義に立ち向かう時に表れます。けれども、彼らは沈黙していました。神様は不義の前に沈黙することは望んでおられません。

イエス様は宗教指導者たちにこの「二人の息子のたとえ」をなさった後、このように尋ねました。

「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか」(マタイ 21:31)

司祭長と長老たちは(福音書には「彼ら」と書かれています)、やむを得ず「兄の方です」と答えました。するとイエス様はその兄が悔い改めた徴税人と娼婦たちであり、彼らが司祭長と長老たちより先に神の国に入るようになるとおっしゃいました。

司祭長と長老たちはイエスの喩え話に非常にプライドを傷つけられたでしょう。それで彼らはイエス様を畏にかけようと企みました。悔い改めないものは自分の既得権を守り、自分を合理化することに陥って、自分が何をしているのかわからなくなります。ですからイエス様は彼らをこのように叱責したりもしました。

「律法学者たちとファリサイ派の人々、あなたたち偽善者は不幸だ。人々の前で天の国を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入らせない。」(マタイ 23:13)

宗教指導者たちが歪めた教えの中の一つは、今日ご一緒に読んだエゼキエル書に記されているこのようなことわざです。

「先祖が酸いぶどうを食べれば、子孫の歯が浮く」(エゼ 18:2)

これは親の罪に対する罰が子にも繋がるという意味です。人々が生きていく間、訳も知らない内に災い、障害、病を経験したりもします。それが神様の罰であることもありますが、そうではないことも多いです。罪があったらそのような罰を受け入れることは容易になるかもしれませんが、罪もないのに、そのようなことを経験することになればとても困惑します。けれども、当時の宗教指導者たちはそのような災い、障害、病が親や先祖の罪によるものであると教えました。ですから当事者たちは訳も知らないまま意気消沈して罪の意識を感じながら生きなければなりませんでした。

このような話はヨハネ福音書にも出ています。イエス様と弟子たちが通りすがり、生まれつきの目の見えない人に見かけました。弟子たちはイエス様に、彼が目の見えなくなったのは、本人が罪を犯したからか、それとも両親が罪を犯したからか、と尋ねました。するとイエス様は、それは本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない、とはっきりとおっしゃいました。今は極めて常識的な考えですが、当時のイエス様のみ言葉は驚くべきものでした。宗教指導者の教えとは全く違ったからです。しかしイエス様の教えは聖書のみ言葉通りでした。それが、今日ご一緒に読んだエゼキエル書にこのように記されています。

「すべての命はわたしのものである。父の命も子の命も、同様にわたしのものである。罪を犯した者、その人が死ぬ。」(18:4)

イスラエルの宗教指導者たちが聖書を注意深く読んでいたら分かるはずですが、しかし、彼らはおろそかにしました。なのでイエス様は愚かさを悟らせてくださり、真の自由への道を教えようとなされたのです。

しかし、考えてみれば、どんな人であれ、罪を犯さず、過ちを犯さずに生きて行くことはできません。生きていくうちにあれこれの過ちを犯すしかありません。時折仕方なく、時折意識もせずに罪を犯すこともあります。ですから、「罪を犯した者、その人が死ぬ」というみ言葉だけでは安心できないところもあります。ですから私たちは尋ねます。

「罪を犯した場合はどうすればいいのですか。死ぬほどの罪を犯したわけではない、小さな過ちを犯した時はどうすればいいのですか。」

この質問に対する答えが今日のメッセージです。それは、悔い改め、即ちいつも神様に立ち帰ろうという心を持って生きていかなければならない、ということです。今日ご一緒に読んだエゼキエル書もこのように悔い改めを強調しています。

「悪人が自分の行った悪から離れて正義と恵みの業を行うなら、彼は自分の命を救うことができる。彼は悔い改めて、自分の行ったすべての背きから離れたのだから、必ず生きる。死ぬことはない。」(エゼ 18:27-28)

信仰者の人生はここから始まります。いや、信仰者の人生は、絶えず悔い改めの過程とも言えるでしょう。生きるために悔い改めなければならないし、神様のみ前に恥じない姿で立つために悔い改めなければならないのです。神様のみ前で正しいと言える人がいるのでしょうか。けれども、私たちは信じています。神様はいつもご自分に立ち帰る人々には慈しみと恵みを与えてくださる、ということをしる！

けれども、人生の現実を見ると、イエス様の喩え話の中に出てくる兄と弟のように正しいことと間違ったことがはっきり区別できる場合もありますが、区別が難しいときもあります。時折兄の姿になったり、時折弟の姿になったりします。高潔な自我の隣には不平を呼び起こす自我があるからです。

それならどうすれば神様のもとに立ち帰ることができるのでしょうか。今日ご一緒に読んだフィリピ書を通して、使

徒パウロは、自分を低くしてへりくだり、謙遜に生きることであり、ということをお教えました。そして具体的にこのように勧められています。

「何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。」(フィリピ 2:3-4)

そして、「キリストの賛歌」を通して、「イエス様は神の身分でありながら、人間の姿をもってこの世に生まれ従順に生きておられた」という事実をお教えました。このような教えを通して私たちは、イエス様の人生を見習うことが救いの道になるということをお信じます。そして、悔い改めようとする心、神様のもとに戻ろうとする心を持って生きていけば、戻ってきた弟のために宴を開いたお父さんのように、神様も私たちのための祝福の宴を開いてくださるとお信じます。

この一週、自分を低くして、神様に従順な人生を通して、神様から豊かな恵みを受けられますように心からお祈りいたします。